

われわれはこのアンソロジーをマックス・シュティルナーから始めるべきであると考えるが、それは二つの理由からである。その第一は年代上の理由である。実際、シュティルナーの主要なリベルテールの著作は一八四二年から一八四四年、すなわちブルードンが最初のアナキズム諸著作(は「所有とは何か」)を公けにした時期に出ている。したがって年代という点から見れば、二人のどちらから始めてもよかったのである。シュティルナーを最初にしたのは、彼がブルードンの登場前に著作を止めたからであり、またこのアンソロジーで彼の場所をほかに見つけがたかったからである。まさしくシュティルナーは孤独な叛逆者であり、孤児なのである。

彼は生活環境においてもすでに独りかけ離れていた。哲学の面ではヘーゲルの反個人主義が支配し、社会批判の面ではブルジョア・エゴイズムの悪が大多数の社会改革家をしてその正反対のものを強調させていた時代にあつて、彼は個人の権利回復を主張した。社会主義という言葉は、個人主義の反対語として生まれたのではないか。マルクスとエンゲルスが、いささかあ

先駆者 マックス・シュティルナー 1806-1856

まりにも厳しく彼をめつた打ちしたのは、このためである。
シュティルナーは、この社会本位的な態度に反対して「唯一の」すなわち他に類のない、自然がただ一つの型に打ち出した個人の固有の価値を宣揚する。ついでにいうと、この見解は、生物学のごく最近の研究成果によって確かめられ、また個人を打ち砕くいっさいの疎外、産業奴隷制ならびに全体主義的順応主義の疎外から個人を救出しようとする現代世界の主たる関心にも、照応するのである。

個人は、己れを解放するためには、シュティルナーによれば、自分を生み育てた若や教育した人々が自分に負わせた荷物を節にかけることから始めなくてはならない。個人は、「非神聖化」という巨大な仕事に専念しなくてはならない。ブルジョア道徳なるものがその手始めになる。シュティルナーは間もなくとくに清教主義を攻撃する。キリスト教が「情念に反対して取りあげている。彼らは、肉の訴えを聴くことを拒み、肉に反対することに己れの熱意を発揮する。彼らは「大口を開けて

背徳を「攻撃する。人々は、フランス第三共和制下の世俗道徳が、いかにシュティルナーの厳しい批判を当然に受けるべきものであるかを知っている。」

わが哲学者は、現代の精神分析に先んじて、内面化を指摘し非難していた。道徳的偏見が、幼年時代以来われわれの頭に詰めこまされた。道徳は、「私がそれから自分を引き離すことのできなない内面的な力」となっている。「その圧制は従前より十倍も有害である。というのは、それは私の良心の中でぶつぶつ小言を言っているからである。」「人は若者たちを無理矢理に群をなして学校に行かせる。これは、彼らが、古いきまり文句を覚え、老人たちのむだ口を暗記したとき、道徳的になつたというためである。」かくしてシュティルナーは偶像破壊者となる。「神、良心、義務、法律は、人がわれわれの頭に詰めこんだばかげたものである。青年を本当に誘惑し墮落させる者は、「若い心を泥まみれにし、若い頭を愚かにする」聖職者、教師、両親である。シュティルナーは一九六八年五月(命)の先駆者である。

たしかに彼のペンを走らせた情熱は、時おり彼を逆説に迷いこませる。そのため彼はふと非社会的な警句を口にする。社会生活の不可能なことを結論さす。しかし折りおりのこうした気分は、彼の思想の根本を表わすものではない。シュティルナーは、その遁世的な態度にもかかわらず、共同体生活を熱望しているのである。孤立した人々、閉ざされた人々、内面的な人々の多くと同様に、彼は共同体生活に郷愁を抱いている。彼の排他主義がどうして彼に社会に生活するのを可能にするのかを訊ねる人に、彼は、ただ自分の「唯一性」を理解した者だけが、自分のような人間と関係をつづけることができるのだと答えている。個人は友人や他人の援助を必要とする。たとえば、書

物を書くとしたら、それを読むのを聴いてくれる耳が必要である。個人は隣人と相結合して自分の力を強め、孤立しては二人とも不可能なことを、共同の力によってよく達成する。「君のうしろに君を護ってくれる何百万人もの人々がいたなら、君たちはいっしょになって強大な勢力となり、勝利を容易に収めるだろう」

しかしこれには一つの条件がある。他者とのこのような関係は、自発的で自由なものであって、いつでも解消できなくてはならない。シュティルナーは、拘束的な既成社会と自由な行為からなる結社とを区別する。かくて彼は、レーニンの分離の権利と等しく、バクーニン、クロボトキンの連合主義をも先取りしている。

「唯一者とその所有」の著者がとくに現代の問題関心に達着するのは、当時の共産主義者の問題とはつきり関連づけて党派の問題を論じているときである。彼は、これから見るように、党派の順応主義に厳しい批判を加える。一枚岩的な党派は、彼の眼からすれば結社ではない。それは死骸でしかない。したがって彼はそのような党派を斥けるけれども、政治団体に入る気はたしかにないわけではない。「私は、私の旗に宣誓する必要なしに私と団結するかなり多数の人々を、いつでも見つけることができるであろう。彼は、いかなる義務をも「負わないとき」にしか、党派に加入しないであろう。彼がとまとして党派に加入するばあいの唯一の条件は、「党派のなすがままにされない」ことである。「党派は彼にとってつねに部分以外の何のものでなく、彼はその仲間入りをし、それに参加する。」「彼は自由に結合し、また同様に彼の自由を取り戻す」

シュティルナーのこの推論には、ただ一つの要素が欠けてい

る。しかし、このことは彼の諸著作に多少なり一貫している。

つまり、彼はその「エゴイズム」が集団にとっても等しく利益になりうることをほとんど認めるにいたらない点である。彼が他者との結合に同意するのは、エゴイズムによつてでしかない。個人と社会とのシュティルナー的結合は不安定なままである。この叛逆者の思想のうちでは、非社会的なものとの社会的なものとの触れ合うことなくつねに对立している。社会本位的アナキストたちには、彼のこの点が不満である。それだけに、ブルードンをよく知らないシュティルナーが、ブルードンを「社会的義務」の名で個人主義的渴望を非とした「権威主義的」共産主義者の一人に数える誤りを犯したのはもつともであった。しかるにブルードンは、なるほど個人に対するシュティルナー的「渴望」は批判したにせよ、彼の著作全体は、個人の擁護と社会の利益、個人の力と集合力との総合もしくはむしろ「均衡」の探究なのである。「個人主義は人間性の基本的事実であり、「その生きた原理である」。だが「結社」はそれを補足する項である」

シュティルナーにあててるページは、フランスにおける彼の弟子、E・アルマン(一八七二—一九六二年)によるその生涯の概略から始めることにする。

E・アルマンによるマックス・シュティルナー

その主著『唯一者とその所有』が、思いがけない幸運に会って出版・再版され、翻訳・改訳され、流布し、世

界の文明諸国民の語るあらゆる言葉で、哲学論文、小冊子、解説書、新聞雑誌の無数の論文の題目とされた、このマックス・シュティルナーとは何者であったのか。

『唯一者とその所有』は、一八四三「四」年に出版され、いくつかの批判の論文を招いたあと、まったく忘れ去られてしまっていたが、そのときジョン・ヘンリ・マッケイという名のドイツ人、彼が二歳のとき死んだ父親からするとスコットランド人だが、母親と養父をとおしドイツの言語と文化で育てられたこのマッケイが、そのご有名になってから、一八七七年夏ロンドンの大英博物館で、ラングがその『唯物論史』でシュティルナーと彼の著書について書いた数行の文章に注意をひかれた。彼はこの書物を手に入れて読んだ。その内容はひどく彼の心を打ち、それを書いたのがどのような人間か、どこで生まれたのか、生涯はどんなであったか、生活状態はどうであったか、死んだ事情はどうか、そう思ったことは自問するようになった。彼は骨身を惜しまず調査しては問い合わせ、図書館を探しまわり、興味をいだくこの人物に関する可能なかぎりの資料をすべて収集し、半世紀ないし四十年前にシュティルナーとしばしば会った人々の子供たちを見つけ、彼らの話を聴き、彼らの記憶を集め、シュティルナーの二度目の妻マリア・デーノンハルトと交渉をもつまでになった。これはまったく骨の折れる仕事であったにちがいない。私がこれから述べようとするのは、この不断の長い努力の結果なのである。

こうした探究から大部の評伝『マックス・シュテイルナー』、その生涯と著作』が生まれた。初版は一八九七年である。この著作は不幸にしてまだ仏訳されていないが、『唯一者』を理解するのにとくに助けになると思う。何ひと、マッケイが、公平無私であるにもかかわらず、彼の主人公に見事な役割を演じさせたことに驚きはしないであろう。彼がシュテイルナーを、ライン河の彼方の国の思想家のうち最も大胆な、最も重要な思想家とみなし、彼をビスマルクではなくてニュートンまたはダーウインのような人の次におき、シュテイルナーがしかも知らなくはなかったニーチェを凌ぐ者としたことには、不都合な点がなくはない。

……マッケイは、マックス・シュテイルナーとはペンネームで、本名はヨハン・カスパー・シュミット (Johann Kaspar Schmidt) であり、一八〇六年十月二十五日、パイロイトで生まれたことをわれわれに教える。シュテイルナー (Stinner) というのは彼の額 (Stirn) が高いことに由来するあだ名である。彼はその名を『唯一者』およびその他の著作に用いた。彼の研究、自由職業の経歴、最初の平凡な、妻の死によって早く破れた結婚のことなどについて、マッケイが収集したことはすべて省略し、『自由人たち』というベルリンの有名なグループとの関係と、これに関してマッケイがわれわれにほめかしていることへ急ぐとしよう。

このクラブないし集まりといった風変わりな集団は、話ができ、尊大な態度と鞭とを入口に置いて入るだけの機転のきく士官たち、こういった人たちが隣り合わせていた。また何人かの「婦人たち」の姿も見られた。マルクスとエンゲルスもよくそこへ行ったが、長くはいなかった。

ボヘミアンで偶像破壊者である「自由人たち」は、いつも世間の評判がよく、名声が高いのではなかった。ヒッペルの所では始終ドイツ式の大饗宴をやっているといふらされた。たまたまそこを訪れたアーノルド・ルーゲはある日こう書いた。「諸君は自由人であろうとしている。しかも諸君は自分たちが落ちこんだ悪臭ふんぶんたる汚辱に気づいていない。われわれが人間と民衆とを解放するのは、不潔卑猥 (Schwüelerei) をもってではない。そうした仕事に専心する前に、諸君自身を清潔にしたまえ。」「ヒッペル団」のメンバーはいつも富裕なわけではなかった。ビヤホールが暴飲を拒んだ晩など、ブルーノ・パウアーやその他の者はウンター・デン・リンデン街で帽子をさしたさなくてはならなかった。ときには気前のよい外国人が事情を理解し、関心を抱くともにおもしろがり、ヒッペルの借りをすっかり払うだけの援助金を出してくれることもあった。

マッケイの語るころでは、シュテイルナーは十年間「自由人たち」とよく会ったという。彼はそこで皮肉な微笑を浮かべ、鉄緑の眼鏡越しに青い眼から瞑想的な鋭いまなざしを放っていた。マッケイは彼を、誰にも心を

上等の酒を飲ませるので有名なヒッペルなる亭主の居酒屋に集まったが、それは当時ベルリンで最も人通りの多い通りの一つにあった。決まりもなければ司会する者もなく、人々はあらゆる批評を軽蔑し、いっさいの検閲を嘲笑した。ライン河の彼方の国のビヤホールにはいった人たちがよく知っている、あの長いパイプから出る煙の中で、熱中し切った議論がつづけられた。あらゆる種類の人々がそこで顔を合わせ、腕を突き合った。何年ものあいだ定まった席にける常連や内輪の仲間もいれば、通りすがりにやってきては出てゆき、またやってきては姿を消してしまふ者たちもいた。

このグループの歴史をよく理解するには——これがある点では『唯一者』の播種である——一八三〇—一八五〇年のドイツの知的世界に立ちいることが必要であろう。当時ドイツは、宗教問題の批判——このころ出たシュトラウスの『イエスの生涯』——により、またついに一八四八年のドイツ革命に帰着すべき政治的自由への熱望によって徹底的に動揺させられていた。

「自由人たち」のところではあらゆる問題について、政治について、社会主義 (共産主義という形での) について、反セミテイズム (唱道されはじめていた)、神学について、権威概念について論じられていた。ブルーノ・パウアーのような神学者たちが、自由主義ジャーナリストたち、詩人たち、著作家たち、権威的な (ex cathedra) 教育から逃げて喜んでいる学生たち、馬と女以外の

許す必要を感じず、自分のことは何一つ他の者に知らせようともしない、冷淡で無感覚で、心の底の知れない人間のように描いている。君僕の問柄の人たちにさえ、自分の喜びや悲しみ、日常生活の細々したことなど何も知らせなかったという。実のところ、われわれには、彼の周囲の人たちの中に親しい友人や不倶戴天といった敵がいたかは知られていない。彼の性格は、彼をして人をはげしく愛したり憎んだりさせなかったようである。質朴で、きちょうめんで、地味で、シガー好きのほかには特別の嗜好も趣味もないシュテイルナーは、すぐそばに近づいた人たちにはこのようであったと、マッケイはわれわれに思わせる。強靱で内向的な人間。

一八四三年、愛想のよいブロードの、夢見がちでセンチメンタルな、いくらか気軽な、メクレンブルク出のマリア・デーハルトと再婚したとき、マックス・シュテイルナーはその生涯の絶頂点にあった。実際、数カ月にして『唯一者』とその所有』が現われたのである。

優れた、しかも自由な教育を身につけたこの婦人も、しばしば「自由人たち」を訪れたのであった。彼女もまたシガーを好み、学生たちが親しむ長いパイプで吸い、ヒッペルおじさんのビールコップを何杯も喜んで空にした。結婚は仕合わせではなかった。マッケイの耳に、彼女がその出所であり、シュテイルナーがその対象である誹謗が鳴り響いた。人々は彼が妻を食い物にして生活していることを非難した。マッケイはその真実を報告しよ

うとした。彼はロンドンでマリア・デーンハルトを見つけた。彼女は、信心深く、歳をとり気むずかしくなっていたが、記憶はなお、彼にこう話すほどしっかりしていた。「あのように教養があり教育も受けた人が、私のような憐れな女を利用して、信頼を裏切つてその財産を勝手に処分することができたこと考えると、血がにえくりかえる」と。これだけではない。このエゴイスト中のエゴイストは、彼の妻を「自由人たち」の中に引き入れ、物質的にも道徳的にも感染させ墮落させられるのを見て、サディズム的な喜びを感じた、と彼女はほのめかしたのである。

これらすべてに、何か真実なものがあるのだろうか？ 私はありません。(Grosso modo) マッケイの論文に拠っている。二人とも金銭上の事には不慣れであり、とりわけシュテイルナーはいつも生活が貧しかったし、金が二人の手から滑りおちるのは、いかにもありそうなことであった。おそらく神経質なマリア・デーンハルトは、彼女に旅路の伴侶を求めた深遠な思想家を理解できなかったであろう。おそらくまた彼女は、彼のうちに自分が望んだ愛人にも出会わなかったであろう。しかしシュテイルナーは冷淡な人間ではなく、むしろロマン主義的だったのである。結婚後少しの間は夫婦として以上に「共同の」生活もした。離婚を余儀なくされる時がきた。それは一八四五年のことであった。

……マックス・シュテイルナーは怠情であるどころ

者だけが彼の最後の旅につきそった。その中に「自由人たち」の古い仲間が二人いた。ブルーノ・パウアとルドヴィッヒ・プーールとであった。

か、つづきさまに著作した。結婚生活の悔恨も、『唯一者』出版のことで味わった幻滅も、彼の知的豊饒さを減退させはしなかった。J・B・セイおよびアダム・スミスの主著の翻訳に熱中したが、それは一八四五一八四七年にライプツィヒで出版され、彼の名で挿入した注や意見を加えて八巻にわたるものであった。一八五二年にはベルリンで、すべてが彼の執筆からなる『反動の歴史』(Geschichte der Reaction)二巻が著わされた。一八五二年にはまた、J・B・セイの小冊子『資本と利子』が注釈つきでハンブルクで出版されたことが知られるのである。

そのご彼のことはもはや人々の口にのほらなくなつた。マッケイはわれわれに、貧窮に攻めたてられて住居を次から次へとさまよっている彼の姿や、この倦むことを知らぬシュテイルナーの伝記作者の発見したことをすべて知らせている。人々はもはやシュテイルナーの姿を見ることがないし、彼のほうも誰をも訪れず、古い友人たちをも避けた。彼はできるかぎりその日暮らしをした。彼はいぜん著述家、教師、哲学博士、おまけに利子生活者をもって自認した。一八五三年には借金で二回投獄された。ヴァイスという下宿の女主人の家具付貸間で最後のしばしの休息を見出した。一八五六年六月二十五日、病毒感染の結果死んだ。その原因は、炭疽病を媒介する蠅に刺されたためであった。彼の苦難は終わった。もう少しで五十歳になるところであった。少数の

わが教育の誤れる原理

以下のテキストはフランス語では未刊であり、現代の教育革命に先んずるものであろう。

……思想の自由は、ひとたび獲得されると現代の推進力となり、その自由を新時代の原理たる意志の自由に脱皮完成せしめる。それゆえ、教育の究極目標は、もはや知識ではありえず、この知識から生まれる意志にある。要するに、それは人格としての人間もしくは自由な人間を創出することを旨とすことであらう。真理とは、われわれが現にあるところのものの開示でなくしては何なのか？ 問題は、われわれ自身を発見し、われわれにとって異質的なものすべてからわれわれを解放し、いっさいの権威からわれわれを根本的に引き離し、あるいはそれを追い払って純真さを取り戻すことである。学校はほんとうに真実な人間など生みはしない。そうした人間が存在するとしても、それは学校の意に反してのことだ。学校はたぶんわれわれを物事の精通者たらしめ、また厳密にいわれわれ自身の本性についても精通させるだろう。しかし学校はわれわれの自由な本性を作りはしな

い。実際、いかに深く広いどんな知識も、どのような鋭いもしくは機敏な精神も、どのような弁証法的精緻さも、思考と意志の低さからわれわれを守れることはできない。

……あらゆる種類の虚栄と利得欲、出世根性、奴隸的熱心、二枚舌等々は、高雅な古典の教養とまったく同様に、博大な知識ともびつたり結びつくのである。こうした、学校が生みだす雑然たるものすべては、われわれの道徳的行為になら影響しないし、なんの役にも立たないだけによく容易に忘れがちである。人々は学校を去るとき、そうした屑を振りすてる。なぜなのか？ 教育が、ただ形式的なものか実利的なもの、せいぜいのところ両者の混合に存し、ならん真実に、真の人間の形成に、存していないからである。

……他はいくつかの分野と同じく教育の分野もまた、自由を入りこませないこと、反抗を容赦しないことをもっぱらとする分野の一つである。そこで望まれているのは服従である。ひたすらに形式のおよび実利的な訓練しか眼中におかれていない。ヒューマニズムの飼育所からは学者しか、現実主義者のそれからは「有用な市民」しか生まれず、両者から生まれるのはともに従順な人間でしかない。「強情」といわれわれの楽しかった昔の心根は、強い力で窒息せしめられ、したがってまた知識が自由意志を結実することも抑えられてしまう。そのため、学校生活は俗物を生みだしている。われわれ

は、幼児と同様に強制されたことをすべて受け入れるように教えこまれ、あとになって実利的生活に甘んじ、時代に順応するようになり、召使に、いわゆる「善良な市民」になる。

ではどこで、これまで保持した従順にかわる反抗の精神を強めようとするのか？ 教えこまれた人間のかわりに創造する人間をどこで形成するのか？ したがってどこで教授者が協力者になり、どこで人々は知識を意志に転換し、かくしてどこで目的が教養ある人間よりもむしろ自由な人間たることに変わるのか？ それは探しても無駄である。そうしたことはめったにないのである。

しかし、人間の最高の務めは、教えこむことでも文明でもなく、自主的活動力であることをもつと念頭に置いておくことが必要だろう。それだけに教養がおろそかにされることになるだろうか？ われわれは、思想の自由を犠牲にすることなど考えないし、むしろその自由を意志の自由に変えることを考える。人間は、自分自身を感じ、知り、自身で、まったく自主的に、己れを十分に意識し、まったく自由に行動することを自ら名譽とする日にかこ、己れにとってよそよそしい、内部へはいりこむことのできない対象ではなくなり、十分な自己認識を制限し妨げる無知を、一掃することを目ざすであろう。

人間に自由の観念を喚起せよ。自由な人間は己れをいよいよ自由にすることしか考えない。これに反して学問のある人間だけを作るなら、彼らは、もっとも教養のある

る、もっとも洗練された仕方であらゆる状況に順応する。彼らは従順で奴隸のような精神の水準に転落する。才気と教養の豊かな紳士諸氏の多くは何者であろうか？ 冷笑的な奴隸制擁護者であり、彼ら自身奴隸なのだ。

……わが現代教育の貧困の大部分は、知識が意志、自主的活動力、純粹の實踐に仕上げられないことに由来する。現実主義者たちはこの欠陥をよく認めてはいる。しかし彼らは、自由とともに理念を欠く「実際的な」人々を形成することにより、情けないやり方で矯正したにすぎない。教師の多くを動かす精神は、そのみじめな姿の生きた証拠である。彼らは、せいぜい自分たちが形成されたように、こんどは子供たちを形成し、自分たちが着せられたように子供たちに着せている。だが教育はすべて人格教育となるべきである。……いいかえれば、教えこまなくてはならぬのは知識ではない。それは、みごとに開花せしめるべき人格である。教育学の出発点は、文明化することではなく、自由な人格、至高の性格を形成することにありべきである。それゆえ、これまでのように意志を手荒らに抑圧し、弱めることを止めなくてはならない。知識への衝動は弱めないのに、なぜ意志への衝動を弱めるのか？ 前者を養うなら、後者をも同様に養うことだ。

子供たちの片意地や「強情」には、彼らの知識欲と同じく存在理由がある。人は知識欲を熱心に刺激する。意志の自然的な力、反抗をも刺激するとよい。もしも子供

が自分でものを感じずることを学ばないならば、彼はまさに大切なことを学んでいないことになる。彼の自尊心や率直さを抑えつけないことだ。彼の手におえないことに対しては、私としてつねになすべき余地があるだろう。子供の自尊心が強情に変わる場合には、彼は私に乱暴を働くことになり、私はこれに逆らうであろう。なぜなら、私も子供と同じく自由だからである。しかし私は權威という安易な岩の背後に避難して身を守るべきであるか？ そうしてはならないのだ。私は私自身の自由の堅さを彼に対抗させる。そうすることによって子供の強情はおのずから折れるであろう。まっとうな人間は權威者であることを必要としない。そしてもし率直さが図太きになるとしても、それは親切な婦人の優しい抵抗、母性的な氣質や父親の決断の前ではその力を失うであろう。權威に助けを求めるのは、まったく弱いからにはかならない。また不作法な子供を臆病にすることで矯正しようとするなら、それは誤りだ。恐怖と尊敬とを必要とするのは、過ぎ去った時代のロココ式の(時代の)やり方である。

かくして、われわれは、現代教育の欠陥を直視するとき、何を嘆くべきであろうか？ われわれの学校がいざんとして古い原理、意志を欠く知識の原理に立っていることである。新しい原理は意志の原理であり、知識の「意志への」変容の原理である。そのことから出発すると、もはや「学校と生活との合致」は不用であり、学校

が生活となり、外部におけると同じくその中で人々の人格の自主的発見を義務とすることになる。学校での一般教養は、服従ではなしに自由を習得することを目標とする。自由であること、これが真実の生活なのだ。

実際教育は自由な人格教育のはるか背後にとどまるものである。前者が人生の行路をたどるための手段を与えるのに対し、後者は人生の火花をとびちらせる力を得させる。もし前者が生徒を所与の世界においてくつろぐように導くとすれば、後者は彼の良心において安んずることを学ばせる。われわれが社会の有用なメンバーとして身を処すのでは、まだすべてが成就されるわけではない。われわれは、自由な人間、自分自身で創造し活動する個体であるという条件においてのみ、そこへ十分に到達しうるのである。

新しい時代の理念、衝撃は意志の自由である。したがって教育学は、自由な人格の形成をもってその出発点とし、また目標としなければならない。……最も下賤な人が最も高位の人々とそこで相会するがゆえに、真に普遍的である文化こそは、万人の真の平等、自由な人格の平等を表わす。なぜなら、自由のみが平等であるからだ。……われわれはこんご人格教育を必要とする。……もし人がこうした原理に従う人々にも「主義者」と名づけようとするならば、私としては人格主義者という名をえらぶであらう。

……結論として、われわれの時代が目ざすべき目標を

唯一者としての所有 1843

国家とよばれるもの

人が国家とよぶのは、従属と愛着とからなる織物と編物のときのものであり、一つの共同体である。そこでは、利害をともにするすべての人々がたがいに順応し、依存し合っている。国家はこの相互依存の秩序である。自己の権威によって、上から下へ、死刑執行人にいたるまでのすべての者に権威を付与する国王がたとえいなくなっても、秩序はいぜん、秩序感を意識に根づかせられたすべての人々により、獸的本能の無秩序に対して維持されるであらう。もし無秩序が勝つならば、それは国家の破滅であらう。

しかし、たがいに順応し、利害をともにし、依存し合うというこの愛情的な観念は、真にわれわれを納得させることができるであらうか？ この考えによると、国家は愛情の実現そのものであり、そこでは各人が他者のために存在し、他者のために生きることになるであらう。だが秩序の意識は個性（*Individualität*）を危うくしないであ

簡単にいい表わすならば、意志を欠く知識の必然的消滅と自由な人格という強烈な陽光の中で達成される自覚的な知識の芽生えとは、次のように理解することができよう。知識は、意志として復活するために死し、自由な人格のごとく、日々に自己を再生しなければならぬ。

ろうか？ 人々は権力によって秩序を確保することで満足し、したがって誰も「隣人の足を踏みつけ」なくなり、衆愚は賢明に囲みの中にいれられ、秩序づけられることにならないであらうか？ このとき万事は最良の秩序にあり、この理想的な秩序が国家なのである。

われわれの社会とわれわれの国家とは、われわれが作らないのに存在し、われわれの同意なしに結成され、予め定められ「存立し」、固有の独立した存在をもち、われわれ個人主義者（*egoist*）に対立し、しかも解消しがたく存在するものである。世界は今日、人々のいうところでは、「現存事態」と闘争している。しかし人々は一般に、この闘争の意味を誤解し、問題はただ、あたかも現存のものをよりよい新しい秩序にとり代えることにあるかのように考えている。だが、戦いを宣しなければならぬのは、現存秩序のすべて、すなわち国家そのものに対してであって、特定の国家、まして国家の現存形態に対してではない。達成すべき目標は、他の国家（たとえ「人民国家」ではなく、*Brüderliche Gesellschaft*）であり、存在するすべてのものの、たえず変化し更新される結社の形成である。

国家は私の仲介（助力）がなくても存在する。私は国家の中で生まれ、教育され、国家に義務を負い、国家に「誓約と服従」をさせなければならぬ。国家はその保護の翼の下に私をかかえこみ、私は国家の恩恵によっ

て生活する。国家の自立的存立は私の自立の欠如の基礎である。国家の自然的成長、その有機体としての生命は、私の独自の天性が自由に成長せず、国家の寸法で裁断されることを要求する。国家は、自然的に自己を展開しうするため、私に「教養」の缺をあてる。国家が私に与える教育・教化は、私には法律を尊重すること、国家の所有（すなわち私的所有）を侵害しないようにつつしむこと、神のおよび世俗的威厳を敬うこと等々を私に教える。要するに、国家は私に、私の個性（*Individualität*）を「神聖性」（所有、他人の生命等々、どんなものでも神聖である）の祭壇にささげることによって、非難されないようになることを教える。国家が私に与える教養と教化の種類はこうしたものである。国家は私を「役に立つ道具」、「社会の有用な一員」に仕立てるのだ。

これこそは、すべての国家が、人民国家であれ、絶対制国家であれ、立憲制国家であれ、なさなくてはならないことである。われわれが、国家は一つの「自我」であり、またそういうものとして「道徳的、神秘的ないしは公的人格」であると信ずる誤謬におちいっているかぎり、国家はそうするであろう。

個人の自由と社会

人間の原初的狀態は孤立または独居ではなく社会生活

一人一人に自分の自由を削られるのに甘んじなくてはならない。私は、全ロシア人の専制君主であるときでさえ、絶対的自由を享受することはできない。だが、私の個性に関しては、人がそれに触れることを欲しない。ところが、社会が標的とし、その権力に従わせようとするのは、まさにこの個性なのである。

私が従属する社会は、たしかにいくつかの自由を私から取り去る。しかしそれと引き替えにはほかのものも私の自由を私に容認する。これこれの自由が（たとえば契約によって）私から取り去られるのは、大したことでない。そのかわりに自分の個性については用心深く警戒する。共同体はすべて、その権力の範囲に応じて多かれ少なかれ己れをメンバーの上に権威として打ち立て、メンバーの活動の自由を制限する傾きがある。共同体は、構成員に従属者たるにふさわしい限られた知識を要求し、また要求せざるをえない。共同体は、彼らが服従せしめられることを欲し、彼らの服従によってのみ存立する。このことはある程度の寛容をなら排除するものではない。それどころか、社会は、種々の改善、計画、叱責、非難を快く受け入れるし、それらが有益であれば、よけいそうする。しかしそれが受けられる非難は、「好意的な」ものでなくてはならない。傲慢非礼であってはならぬ、それを神聖と考へなくてはならない。社会は、人々

である。われわれの生活は最も親密な結合ではじまる。というのは、われわれは、呼吸する以前にすでに母親といっしょに生きているからであり、ついでこの世の光に眼を開くときにはある人の胸に自分を見出すからである。その人の愛は、われわれを静かに揺り動かす、われわれをつなぎとめ、数多くの絆でわれわれをその人に縛りつける。社会はわれわれの自然状態である。われわれが自分を感知することを覚えるにつれ、初めはかくも緊密であった結合がしだいに弛み、原初社会の解体がますます明白になるのは、このためである。もしも母親が、前にはその胎内にいた子供をもう一度自分のものにしたと思うならば、彼女は街頭に出て彼を探し、遊び仲間の中から取りあげなくてはならない。なぜなら、幼児は、自分から加わったのではなく、そこへ生みおとされたにすぎない社会よりも、自分と同じような者たちと交わるほうを好むからである。

……結社は、不断の再結社化の働きであるから、社会に結晶すると、もはや結社ではなくなる。それは停止状態の結社となり、凝固する。それは結社としては死に、もはや結社の死骸たるにすぎない。要するに、社会となり共同体となる。党派（政治的）はこの過程の雄弁な実例を提供する。

ある社会、たとえば国家という社会が、私の自由を削り取ることなど、私にはあまり関係がない。私は、あらゆる種類の力、私より強いすべての存在、さらに仲間のと、すなわち人々が社会とその法の認めることしか認めないことを要求するのである。

私の自由を制限する社会と私の個性を制限する社会との間にはちがいがあつた。組合、協定、結社が前者の場合である。しかし私の個性が脅かされるとき、相手の社会は一つの権力そのもの、私の上に立つ権力であり、私の近づきえないものであつて、なるほど感嘆し、渴望し、崇拜し、尊重することはできるが、しかしその前で断念し権利を放棄しているという理由のゆえに、もはや征服することも利用することもできないのである。こうした社会は、私の断念、私の自己放棄、私の卑怯、いわゆる謙讓といわれるものの上に存立している。私の謙讓がこの社会に力を与え、私の屈従がその支配をつくり出すのだ。

しかし自由に関しては、国家と結社との間に本質的な差異はない。いかなる結社も自由の若干の制限なしには建設されも存立することもできない。これは、すべての国家が無制限の自由と両立できないのと同じである。自由の制限はどこでも不可避である。なぜなら、われわれはあらゆるものから自由の身になることはできないからだ。人はいくら鳥のように飛びたいと思っても、飛ぶことはできない。自分の体重から解放されたいからだ。われわれは魚のように水中で意のままに生きることができない。なぜなら、われわれは空気にしですませることができないし、この必要物から自由になりえないから

だ、等々。

……たしかに結社は、より大きな度合の自由を取得させ、また「新しい自由」とみなされることもできる。実際、そこでは人々は国家および社会の生活に固有なすべての拘束から免れている。しかしこうした利点にもかかわらず、結社もやはりある数の束縛を要求する。

……個性の点に関してはというと、国家と結社との差異は著大である。国家は個性の敵、殺戮者であり、結社は個性の娘、補助者である。前者は、精神と真実とにかけられわかれが崇敬することを要求する精神であり、後者は私の作品であり創作である。国家は私の精神の主人であり、私の信仰を要求し、私に信仰個条、合法性の信条を強制する。国家は私に道徳的影響を及ぼし、私の精神を支配し、私の自我を取り上げ、「私の真の自我」としてそれとてかわる。要するに、国家は神聖であり、私に対し、個体に対して真の人間であり、精神であり、幽霊である。

それに反して結社は私自身の創造であり、私の被造物である。それは神聖ではなく、私の精神の上に立つ精神的権力として強制はしない。私は己れの格律の奴隷であることを欲せず、むしろそれら格律を不断の批判に従わせ、自分の許ではそれらにかなる市民権をも認めない。私はまた結社に対しても、全将来にわたって自分に義務を負わせ、「悪魔がいうように」それに魂を売ろうとは欲しない。しかも、このようなことが実際に国家や

他のあらゆる精神的權威に関しては起こっているのである。私は私自身にとってつねに国家、教会、神等々以上のものであり、したがってまた無限に結社以上のものでもあり、かくありつづけるであらう。

……人は私にいう、私は、同胞の間でこそ人間となるはずであり「マルクス」ユダヤ人問題によせて「彼らのうちなる同胞を尊重すべきである、と。何人も私にあっては尊重すべきでなく、私の同胞とてもそうである。彼はただ、他のすべての者と同じく、私が関心を抱きもしくは抱かない対象であり、有用か無用かの一人物である。

もし彼が有用であるならば、私はたしかに彼と合意し、彼と協力しようとする。それによって私の力を強化し、われわれの共同の力によって、個々になす以上のことをなすようになるためである。私はこの共同関係に私の力の増加以上のものを見ないし、この力の増加がその効果を生みだす間だけその共同関係に同意するにすぎない。そうしたときにこそ、結社が存立するのである。

結社を維持するものは、自然的絆でも精神的絆でもなく、また結社は自然的結合や精神的結合ではない。その起源は血縁にも共通の信仰にもない。家族、部族、民族、さらに人類のごとき自然的結合においては、諸個人は、同じ属、同じ種の標本としての価値をもつにすぎない。精神的結合、宗教的共同体または教会においては、個人は共通の精神に支配される一成員にすぎない。その

いずれの場合においても、君が唯一者として表示するところのものは窒息せしめられざるをえない。君はただ結社においてのみ、唯一の個人としての自己を確認することができる。というのは、結社は君を占有せず、君のほうこそ結社を占有し、己れのために利用するからである。

……国家はもろもろの欲望を制御しようとしてとめる。

言いかえれば、国家はそれら欲望を己れのほうにだけ向けさせ、己れの提供しうるものをもってそれらを満足させようとする。国家は、欲張りな人々のためを思って彼らの欲望を満足させようとはしない。それどころか、気ままな欲望に駆られる者を「エゴイスト」として扱い、「エゴイスト」である人間は国家の敵となる。国家が彼を敵とみなすのは、「エゴイスト」と折り合い、彼を理解する能力を欠くからである。国家としてはそれ以外ではありえない、ただ自分のことのみ専心し、私の必要など気にかけない。国家が私のことを気にかけるのはただ私を殺すため、すなわち私から別の私、善良な市民をつくるためである。国家は「道徳改善」に種々の配慮をする。そして個人を獲得するためには何をしているか？

国家はそれのために独自の手段を尽くしている。国家はあくまですべての人々を自己の「富」に、教育と文化の恩恵に与らせようとする。国家は諸君に教育という贈物をする。国家は諸君のために教育施設の門戸を開放し、産業の諸方面によって所有すなわち封地にありつく手段を

与える。この封地授与のかわりに国家が諸君に要求するのは、ただ不断の感謝という正当な貢税である。この納付金を納めるのを忘れる者は「忘恩者」だ。……

結社では、君の全力、君のもっているすべてを傾け、自分を有効に働かせる。社会もまた君と、君の労働力を搾取する。結社では君は個人主義者（エゴイ）として生き、社会では領主のぶどう畑で働かなくてはならない。君はもっているすべてを社会に負うており、社会に対して義務づけられ、「社会的義務」に押しつぶされている。結社については、それを役立てるのは君であり、それからもはや何も引き出すものがないとわかれば、君はそれを捨て去る。君は結社に何も負うていないし、それに忠誠である必要もない。

社会は君以上のものであり、君を強制する。結社は、それで君の自然の力をいっそう鋭利にする君の道具であり、剣であるにすぎない。社会はこれと反対に己れのために君を要求する。社会は君がいなくても存在することができる。これを要するに社会は神聖であるのに対し、結社は君のものである。社会は君を利用するが、結社を利用するのは君なのだ。

党 派

近來人々が讃歌をうたっている党派もまた、社会の章に属する。

党派は国家の中に席を占めている。「党派よ、党派よ、誰かこれに属さない者がいようか！」しかし個人は唯一の自由で結合し、また自由に離れる。党派は国家の中の国家でしかなく、この蜜蜂社会においても、最大の社会におけると同じく、平和が支配すべきである。国家の内には対立が存在するにちがいないと力のかぎり叫ぶ人々も、党派内部のごく些細な仲たがいを厳しく非難する。このことは彼らもまた単一の国家しか欲していないことを証明する。すべての党派が両立しえないのは、国家とではなく、唯一者たる個人とである。

今日、自己の党派に忠誠であれという勧告ほどありふれたことはなく、自己の党派を見棄てる者ほど党派人の眼に軽蔑すべきものに映することはない。人はつねにまたどこでも己れの政党に従うべきであり、その本質的諸原則を無条件に認め、支持しなくてはならないという。事情はたしかに、そのメンバーを信条または規約に縛りつけるある種の閉鎖的社会(諸教団、イエズス会のごとき)におけるほど極端ではない。しかし党派は、一定の諸原則を強制し、それらをいっさいの攻撃から守らうとするとき、結社ではなくなる。この瞬間がまさに党派誕生の日である。それは、党派として、構成された(生れな)社会、死んだ結社である。それは固定観念のごときものとなる。絶対主義の党派としては、その原則の無謬性が黨員たちに疑われるのを認めまいとする。黨員たちは、

党派の外部でも何ものかであり、すなわち「非党派的」であろうと欲するほどに個人主義者(エゴイ)である場合にのみ、そうした疑念をいだくことができる。彼らは、党派人たるかぎり、非党派的ではありえないし、そうでありうるのは、ただ個人主義者(エゴイ)としてでしかない。

君がプロテスタントであつて、この党派に属するならば、君はただプロテスタンティズムを正当化し、敵密には「浄化」することができただけで、これを拒否することはできない。君がキリスト者であり、キリスト教的党派に加わっているならば、君はこの党派の一員としてはそれから身を退くことはできず、ただ君のエゴイズムすなわち君の非党派性が君をそこへ押し進めるときにのみ可能である。キリスト者からヘーゲルおよび共産主義者にいたるまでの人々が、己れの党派を強固にするため、どのような努力を払ってきたにせよ、彼らはこれ以上のこと何も見出さなかつたのである。キリスト教は永久の真理を含んでおり、人はただその真理を発見し、確立し、正当化することだけをなすべきだ、と。

これを要するに、党派は非党派性を容赦しない。そしてエゴイズムが現われるのは、まさにこの非党派性においてである。党派など私に何のかわりがあるか？ 私はいつでも、私の旗に誓ひをたてる必要もなしに私と相結ぶ人々を十分に見出すであらう。

一つの党派から他の党派に移る者は、すぐに「変節

者」として扱われる。道徳は自らの党派に忠誠であることを要求し、これを見棄てるのは無節操の汚名で己れを汚すことであるという。ただ個性のみが「忠誠」や「愛着」のいかなる掟をも認めない。それは背教や棄教を含むすべてのことを許容する。道徳家たちは、彼らの党派に加わってくる棄教者を判断しなくてはならないときには、無意識のうちに、自らをこの原則に導かれるにまかせ、改宗させることをもたしかに遠慮しない。彼らはただ、人は個体として行動しようとするならば、非道徳的に振舞わなくてはならず、いいかえれば、人は、道徳的次元の考慮によって決定されるかわりに、自分自身で決定するためには、自己の信仰を棄て、また自己の誓いまでも破らなくてはならないという事実を自覚すべきである。

厳格な道徳に忠実な人々の眼には、背教者はつねにあまりいな色合いに見え、容易に信頼をちやうることがない。彼は「不信」の、結局は非道徳性の汚点を身に着けている。このような見方は普通の人々にあつてはほとんど一般的である。開明された人々においても、この点他ののすべとと同じく、不確かと混乱に陥っている。道徳の原理が必然的に生みだす矛盾については、彼らはことさらに認めない。それは彼らの観念が混乱しているためである。彼らは背教者をあえて非道徳扱いはしない。なぜなら、彼らは自分自身を背教に、改宗に促し、しかも道徳的立場を放棄することを欲しないからである。この立

場をぬぎすぎる機会、これを彼らは真実とらえうるであらう！

個人(独白者)や唯一者たちも一つの党派を形成するか？ 彼らは、党派のメンバーであるとしたり、どうして唯一者でありうるのか？

人はいかなる党派にも属してはならないであろうか？ 私は、ある党派に加わり、その圈内にはいることによつて、その党派と協力関係を結び、その関係は党派と私とが共通の目的をもつにする間は継続する。しかし私は今日は党派の傾向をともしても、明日はもはやそうではなく、党派に「不誠実」になる。党派は私にとってなら義務的なもの、束縛するものではなく、私はそれを尊重しない。私の氣にいらなくなれば、私はそれを敵とする。

自己の存立を擁護するあらゆる党派において、その成員は、党派のごまごました要求に屈するのに応じ、それだけ自由でなく、「唯一者」でなくなり、個性(エゴイ)を奪われる。党派の自立性はその成員の従属性をひき起こす。

党派は、いかなる性質のものにせよ、けつして信仰告白なしですますことはできない。すなわち党派の成員たる者は、その原則を信すべきであり、それを少しも疑い、問題にしてはならない。原則は彼らにとって確実なもの、疑うべからざるものでなくてはならない。要するに、人は身も心もあげて党派に帰属しなければならな

い。さもないと、彼は真の党派人ではなく、多かれ少なかれ個人主義者(エゴイ)になる。キリスト教に疑いをさしはさむなら、君はもう真のキリスト者ではなく、キリスト教を再び裁きかけ、君自身の法廷に召喚するといふ非礼を犯すことになる。君はキリスト教に対し、ある党派の大義に対して罪を犯したことになる。……だが怯えさえしなければ、それだけ君にとってよいことである。君の非礼は君の個性を獲得する助けになるからだ。では、と人は問うだろう、個人主義者(エゴイ)は決して党派にかかわることはできないのかと。党派の捉えるままにされないという条件でなら、できる。党派は彼らにとつてつねに一つの部分でしかない。彼は仲間にはいり、参加するのである。

叛逆と革命

革命と叛逆とは同義のものとみなされるべきではない。前者は、現存事態、国家または社会の状態の顛覆であり、したがって政治的もしくは社会的行為である。後者は、現存事態の顛覆を不可避的にもなすが、この変革を出発点とはしない。それは人間が己れ自身に關して不満であるという事実から発する。それは、武装叛乱ではなく個の立ち上りであり、それが生みだしやすう諸制度などをなんら意に介さない叛乱である。革命のほうは新しい制度を目標とする。叛逆は、われわれをもはや管

理されるままでなく、自分自身で管理するように導き、来たるべき「諸制度」に驚嘆すべき物事などを期待しない。叛逆は現存するものへの戦いである。それが成功すれば、現存のものはひとりてに崩壊する。叛逆は私自身を現存事態から解放することにほかならない。現存事態は、私が見棄てるやいなや、死滅し、腐蝕する。ところで、私の目的は、現存するものの顛覆ではなく、私をその上に引き上げることにある以上、私の行為は、政治的または社会的なものではなく、私自身と私の個性だけを目的とし、「エゴイスト的」なそれである。革命の要求するものは制度である。叛逆が求めるのは、人々が蜂起すること、もしくは起ち上ることである。憲法の選択といったことが、革命派領袖の関心事であった。革命の全政治史は、憲法闘争と憲法問題とで湧きかえった。同様に社会改革家たちの才能も、諸社会制度(フアランスタール、その他)についてきわめて豊かであることを示している。だが叛逆はいさゝいの憲法から脱却することに努力する。

反批判

以下のテクストはフランス語では未刊である。ここでシュティルナーは第三者と彼の批判者の多くに答えている。最初のものは、「シュティルナーに關する報告の著者たち」という表題で、ヴィガント季刊誌一八四五年第三巻に発表されたものである。シュティルナーはまずルートヴィヒ・フォイエルバッハに答えた。シュティルナーがその著書で辛辣に攻撃した「キリスト教の本質」の著者は、同じ雑誌の第二巻に匿名で「唯一者とその所有」との關係に對する「キリスト教の本質」について」という一文を発表した。シュティルナーはそれに次いでモーズ・ヘスに答えた。ヘスは、一八四五年ダルムシュタットにおいて「最後の哲学者たち」という名で発表した二八ページのの小冊子で、シュティルナーを攻撃したのである。この「反批判」の第二部は、G・エドワードという匿名で、オットー・ヴィガントのエピゴーネンたちの雑誌の第四巻に「哲学的反動家たちはクノー・フィッシャーの『現代ソフィストたち』に答える」という表題の下に発表された。シュティルナーは、クノー・フィッシャーの批判に對してはいつも第三者風に応えた。フィッシャーの批判は、一八四七年「ライプツィックと評論」に「現代のソフィストたち」という名で発表され、主としてシュティルナーに向けられたものであった。

今日の読者に興味があるのは、おそらく、論敵と争うシュティルナーの屁理屈や詭弁よりも、彼が自己の個人主義的「エゴイズム」を通俗のエゴイズムから区別し、自己の個人主義を結社の精神と合致させる考え方にある。

シュティルナー的エゴイズムとは何か?

人々は、エゴイズムについて一定の観念をつくりあげ、かくしてそれをまったく単純に「孤立」と理解する。だが、エゴイズムは孤立と何かかわりをもちうるのか? 私が、もし、たとえは人々を避けるとしたら、私はエゴイストになるのか? 私はたぶん孤立するかどうか、私ぼっちになるかどうか。しかし、だからといって私は、人々と親しくし、それを樂しむとするほかの人たちよりもエゴイストなのではない。私が孤立するとすれば、それは社会にもはや樂しみを見出さないからだ。もし私が社会にとどまっているとしたら、それは人々が私に多くのものを提供してくれるからである。人々の間にとどまることは、彼らから孤立することに劣らずエゴイスト的である。

競争においてはたしかに各自が孤立している。だがいつか、人々が共同の活動のほうに孤立よりも有利なことを認めるため、おそらく競争はなくなるだろうが、そのとき、結社においては、各人すべてが、おしなべてエゴイストではなくなり、自己の利益を求めようとしない

であろうか？ だが、と人は言葉を返す、そうであるのは、他人を犠牲にしてのことではなく、各人が他人の犠牲によって生活するのをゆるすほど、その他人が愚かであるとはもはや欲しないという正当な理由によってである、と。

しかも人はいう、「自分のことしか考えないのはエゴイストだ。だがこれは、他人に抱く関心、他人のためには配慮から生じる喜びを何ひとつ知らず、重んずることがわからない者のことであろう。こんなことをいうのは、数知れぬ多くの楽しみを奪われた者、気の毒な性情の人であろう。では、どうしてこのような流刑者、孤立者は、より豊かな性情の人々よりもエゴイストであると宣告されるのであろうか？ 牡蠣は犬より、黒人はドイツ人より、人から蔑まれる貧しいユダヤ人の古道具屋は熱心な社会主義者より、自分に感興のない芸術品を破壊する文化破壊者はそれに関心と趣味をいだくがゆえに最大の配慮を払う注意深い女人より、エゴイストであろうか？ そしてもし人々に対してなら「人間的」関心も抱かず、人間たる限りでの彼らを尊重することを知らないような何びとかが存在するならば——その存在が証明されうるかどうかを知る問題は、未解決のままにしよう——、彼は貧弱なエゴイストであって真正のエゴイストではないのではなからうか？……人間を愛する者は、この愛の事実からして誰をも愛さない者より豊かである。だがここでは、エゴイストと非エゴイストとの対立

には関係がない。これら二つの人間タイプは、それぞれの仕方ですれぞれの関心を目指すだけである。

「それにしても、各人は人々に関心をいだき、人々を愛さなくてはならない！」よからう！この義務、この愛の掟をもって諸君がどこに行きつつかを見るがよい。二千年このかた、人はそうしたもので人々の心を満たしてきた。しかるに今日社会主義者たちは、わが無産者たちが古代の奴隷よりも軽んじられていることを不満とし、しかもこの同じ社会主義者たちが再び声を張り上げて愛の掟を説教するのである。

諸君は人々が諸君に関心の証しをすることを欲するのにか？ よからう！ 彼らにそれを証すように強制するがよい。そして自分らの神聖なる人間性を神聖なる習慣として示し、「神聖なるわれらの人間性に対する尊重！」を物乞いのように叫ぶおもしろ味のない聖人であることをやめるがよい。

シュティルナーがその主唱者であるエゴイズムは、愛や思想の反対のものではなく、甘美な愛の生活や献身および犠牲の敵でもなく、最も優しい真心に敵対せず、もはや批判や社会主義の敵ではなく、要するにいかなる関心の敵でもない。それはどのような関心をも排除しない。それはただ無関心と興味を感じない人々々に反対する。それは、愛には反対しないが神聖な愛に反対し、思想に反対しないが神聖な思想に反対し、社会主義者たちに反対しないが神聖な社会主義者たちに反対するのであ

る、等々。

人が「孤立」、「分離」とみなさせようとする真正なエゴイストの「排他主義」は、逆に、関心を喚起するもの、また関心を喚起しないものの排除への全面的な荷担である。

シュティルナーの書物の最も重要な章は、「私の交わり」世界との交わりおよびエゴイストの結社であるが、人々はそれをシュティルナーの功績とは認めなかったのである。

モーゼス・ヘスと二種のエゴイストの結社

……ヘスはこう主張する、「われわれの歴史はすべてこれまでエゴイスト的結社の歴史以外の何ものでもなく、その成果たる古代の奴隷制、ローマの農奴制および現代の原理的また普遍的な従属制は、われわれのみならずよく知るところである」と。まず最初にヘスはここで……シュティルナーの「エゴイストの結社」という表現のかわりに「エゴイスト的結社」の表現を用いている。彼の読者たちには……必ずや、彼の語る結社が「エゴイスト的結社」であったことがただちに正確かつ疑いの余地なくわかるであろう。しかし、大部分の人々が彼らの最も自然的で明白な利害についてだまされているような結社が、「エゴイスト」の結社であらうか？ ある者が他の者の奴隷または農奴である所で、結社をなしている人々

は本当に「エゴイスト」であらうか？ そのような社会にもおそらくエゴイストは存在し、そのかぎりではその社会はある見せかけとしては「エゴイスト的結社」と特質づけることができるであらう。だが、実は、奴隷たちはエゴイズムからこの社会を求めたのではない。彼らは、そのエゴイスト的心情では、ヘスのいうこれら麗しい「結社」にむしろ反対しているのだ。

ある人々の欲望が他の人々の欲望を犠牲にして満たされ、たとえはある人々の休息の欲望が他の人々が疲れきるまで働かざるをえない事実のおかげで充足されることができ、他の人々が貧困のうちに生活し、また餓死するがゆえに、安楽な生活を送ることができ、あるいはまた他の人々が赤貧の暮らしに甘んずるほど愚かであるために、放埒な生活ができる、等々の社会、このような社会をヘスは「エゴイスト的結社」とよび、さらに無邪気に、また許しがたいやり方で彼式の「エゴイスト的結社」をシュティルナーの「エゴイストの結社」と同一視するのだ。「エゴイスト的結社」という表現を用いることはたしかにシュティルナーにもある。しかしこの表現は、第一に明らかに「エゴイストの結社」であり、第二に適切である。ヘスがこの名称を命名するのは、むしろ宗教的結社、法や法律によって、また正義のあらゆる形式または儀式によって、聖なる尊敬を保持している共同体である。

もしもヘスが、エゴイスト的結社を紙の上ではなく生

活自体において見ることに同意するならば、これと異な
 ってくるであろう。ファウストは、「ここではわたしは
 人間だ、ここではわたしは人間でいることができる」と
 叫んだとき、そのような結社の核心に触れたのである。

……ゲーテはわれわれにこのことを明白に語っている。
 もしもヘスが、かくも彼が抛りどころにするといわれる
 現実生活を注意深く観察するならば、彼の眼の前に、あ
 る場合には東の間の、ある場合には永続的な、この種の
 エゴイスト的結社を、いく百となく見たであろう。おそ
 らくいまこの瞬間にも、子供たちが彼の窓の前に集まっ
 て、遊び仲間となっているであろう。そこで彼は彼らを
 観察し、楽しいエゴイスト的結社を認めるであろう。
 たぶんヘスには友人が、最愛の人がいるであろう。この
 場合彼は、どのようにして心が心の通う途を見出し、ど
 のようにして二人が、どちらも「敗者とならずに」、互
 いに享受するためエゴイスト的に結合するかを知ること
 ができる。彼は通りで人の好い仲間たちに会い、いっし
 ゃにカフェに入ろうとさそわれることがある。そのと
 き、彼は仲間たちに愛想よくするためにこの招きを受け
 るのか、それともそれに楽しみを期待して彼らに加わる
 のか？ 仲間たちは彼の「犠牲」を熱烈に感謝しなけれ
 ばならないのか、それとも彼らはみんなでちよつとの間
 「エゴイスト的結社」を作っていることを知るのか？

フオイエルバッハの抽象的「人間」

……フオイエルバッハは、「人間」は存在しないこと、
 人間は恣意的抽象であることを忘れ、人間を理想とす
 る。彼が結局、人間を、秘密の「権能」、セウスの関
 係におけるギリシャの諸神のごとく、彼に多神教的機能
 を授ける「権能」を与えられた属的、神秘的、非人格的
 存在とみなしていることに、どうして驚くことがあろ
 う？……このような合言葉、「ヒューマニズム」という
 言葉のこのような使い方に對して、シュティルナーは
 「エゴイズム」を對置する。なぜ？ 君は僕に「人間」
 であること、男子であることを要求するのか？ え、な
 んだって！ 「人間」「裸の子供」「男子」、私はかつて
 振りかごにいた。それはむろんそのとおりだが、しかし
 私はそれ以上である。私は、自分自身の力で、自分の発
 展をおし、外部の世界、歴史等々をわがものとすること
 によって生成するところのものである。私は「唯一
 者」なのだ。だが、これは結局君の欲しないことだ。君
 は僕が現実の人間であることを欲しない。君は僕の唯一
 性には一スーも払いはしまい。君は僕が君の描いたよう
 な人間、理想的、模範的タイプであることを望んでい
 る。君は「庶民平等の原則」を僕の生活規範たらしめよ
 うとする。

原理のための原理、要求のための要求、僕は君にエゴ

イズムの原理を對抗させる。僕はただ自我であることを
 欲する。僕は、自然を嫌い、人々と彼らの法ならびに人
 間社会とその愛を軽蔑し、それとの関係一般のすべてに、
 言語の關係さえも断ち切る。君たちの義務、君たちの
 「汝なすべし」の主張、君たちの定言的判斷の判決に對
 して、私は自分の自我の「アトラクシア」(完全な、平穩
 を一括して対立させる。僕が言語を用いるのは、たんな
 る寛容からである。僕は「言語を絶する者」であり、僕
 が自分をそう見せ、またそう見せるとすれば、すべては
 そのとおりだ。僕は、君たちにたずねるが、人間的なる
 もののいっさいを遠ざける僕の自我のテロリズムにおい
 て、僕が君たちの教理問答に背き、僕の自己享受が妨げ
 られるのを拒むとき、君たちの人間性のテロリズムをも
 って、率直に僕を「非人間的」と烙印すると、同じ程
 度に正当なのではないか？

これは、シュティルナーが彼の「エゴイズム」をもつ
 て、われわれすべてに属するものを否認し、それを存在し
 ないものと断言しようとする、無条件の否定によつて、
 われわれの社会組織の、何びとも逃れえないいっさい
 の特殊の性質を一掃しようとする、語るものである。こ
 れは、彼がすべての人間的共同体を放棄
 し、いわば自殺に帰着する蛹まぶたに変じようとすることを
 語るものであろうか？ これはまったくかなりいい加減
 な誤解である。……しかしシュティルナーの著作には、
 重要な「演繹」、きわめて重要な力強い結論があり、こ

れは、おそらく多くの場合、行間にしか読み取れず、哲
 学者たちにまったく見落とされてきている。その理由は、彼
 らが現実の人間を知らず、現実の人間としての彼ら自身
 を知らないこと、つねに「人間」、アブリオリに「精神」
 そのもの、名称にのみかかわり、事柄、人間自体にかか
 わらないことにある。これこそは、シュティルナーが
 観念論のあらゆる幻想を分析し、無私の献身と犠牲との
 あらゆる虚偽をばくとききの辛辣な、逆らいたいがたい批判
 によって、否定的に表明したことである。これが、彼の
 輝かしい批判が盲目の個人的利益、最も狭いエゴイズム
 の礼讃として、もう一度理解しようとしたところのもの
 であることは、たしかである。

……シュティルナー自身は、彼の著書を、彼が語るう
 としたことの、部分的には「不手際な」表現であるとし
 た。それは彼の生涯のより良い年月の苦心の著作であ
 る。しかし彼はまた、哲学者たちによって改ざんされ、
 国家、宗教、その他もろもろの信条の信者たちによって
 傷つけられた言語、限らない観念の混乱を生みだした言
 語と取り組んだかぎりにおいて、一部「不手際」である
 ことを認めている。

1 ブルドンはシュティルナーの名を挙げていないので、読
 んだことがあるかどうかは確かではない。

- 2 マッケイはその多くが古典となった詩のほか、小説でも著名であり、小説では『アナキストたち』と『自由探検者』をあげるのが適切である。なお彼はドイツの個人探検者アナキスム運動に果たした役割においても著名である。
- 3 『ツアラトストラ』の詩人の額は、彼がホップス以後出版された最も大胆な書物と評した『唯一者』の名が、彼の前で口にされたとき、輝いたという。「彼はシュティルナーとの相似をよく感じていたので、自分がいつか彼の剽窃者としてとらえるようになるのを恐れていた。(Ch・アンドラー「ニーチュ、その生涯と思想」第四巻、一九二八年) マックス・シュティルナー『小論文集』(一八九八年)より抜萃。

- 5 マックス・シュティルナー『唯一者とその所有』(一八八八年)より抜萃。表題はすべて編者のものである。(草間平作訳・岩波文庫、片岡啓治訳・現代思潮社)
- 6 ドイツ語では Volkstaat。ドイツでシュティルナーの時代すでに一般に用いられていたこの表現は、四分の一世紀後ドイツ社会民主党の標語の一つとなった。マルクスとエンゲルスは、初めこの表現を大目に見ていたが、この点バクレーンの批判で攻撃されてからは、それを非とした。
- 7 『小論文集』より抜萃。
- 8 『唯一者とその所有』より抜萃。

P = J・ブルードン 1809-1865

『ピエール・ジョセフ・ブルードン』は一八六五年一月十六日、パリで、度はずれな頭脳酷使のため早くも身を消耗しつくし、ようやく五十六歳にして死んだ。この元労働者、百姓の息子、独力で身を立てた独学者の人となり、わずかな数語でどのようにして想起させることができる。

ほかのすべての功績は別にしても、彼はフランス語で最大の著述家の一人であり、文芸批評家サント・ブーヴは彼に一書全体を充てている。(Sainte-Beuve, P.-J. Proudhon, sa Vie et sa Correspondance, 1838-1848, Paris, 1872. 現代思潮社)

ブルードンの天分は多方面にわたる、彼の全著作(書簡集十四巻、刊行中の手帳(三巻)、ピエール・オブマンの学位論文が示す未刊の草稿を加えて)は多過ぎるほどである。彼は、「科学的社会主義」、社会主義経済学および現代社会学の父であり、同時に、「アナキズム」、革命的サンディカルズム、連合主義および今日「自主管理」を実現する特殊な形態の集産主義の父である。歴史、とくにフランス革命やナポレオンに対する彼の見解は、ミシユレ(ジュール・ミシユレ、著名な歴史家)持ち前

の直観的洞察を含んでいる。最後に、またとりわけ、権威主義的、国家管理的、教条主義的社会主義の危険を最初に見てとり、予言的に告知したのである。

一八四八年の革命はブルードンにとって、勇気を欠いたどころか、革命の舞台に降りていく機会となり、第二次ボナパルト体制のもとでの大胆な現状顛覆を訴える文書のために、彼は訴追、投獄、亡命を蒙る身となった。

彼の独創的かつ逆説的な精神的傾向は、強力な庶民的熱情のために誇張され、あまりにもしばしば彼の頭脳を、戦争、進歩、女権拡張論、人種主義、芸術、性等々に関する極端な観念に沸きかえらせた。彼は初期のキリスト教による人間形成からけつして全体的には解放されなかったし、彼の最も記念碑的な著作、かつ表明された反教権主義の中で最も辛辣かつ粉砕的な著作の一つにおいても、正義は、結局のところ、神からほとんど区別されないし、それと同義であるように思われる。彼はさらに、ある人々をおしてヘーゲルを読んだことに負うている強度の観念論的真跡を打ち棄てることに成功せず、彼の根本